

えがおのたねとき



SAKUKOの
コラムより

NPO 法人「えがおのたね」10周年シンポジウム 『子どもの可能性を開くには』

① 「その子にはその子の考え方・感じ方がある。」～保護者・藤田さんのお話～

10年前。5人のお母さん達が立ち上げた、東所沢のNPO法人「えがおのたね」。
「通ってくるお子さんやご家族が、心から安心して笑顔あふれる毎日を過ごして欲しい。」「そこに行けば元気いっぱい、えがおになれる。そんな場所を作りたい。」
そのような思いを胸に、児童発達支援・放課後等デイサービスの「きなこ」を開所しました。
その後、2018年には中高生の自立のための放課後等デイサービス「Lino」を。
2022年には保育所等訪問支援の「パスレルきなこ」を開所し、地域に根差して事業を展開してきました。
そして今年、「えがおのたね」は10周年を迎えました。
それを記念して、先月、所沢のMUSEでシンポジウムを開催しました。
当日は二部構成で、第一部は『子どもの可能性を開くには』というテーマで、3人の方からお話をうかがいました。そして第二部は、会場にいらした方からの質問に答える形の討論会が行われました。

今月のコラムは、そのシンポジウムの様子を、毎週金曜日、5週にわたってお伝えさせていただきます。

シンポジウム、一番目にお話してくださったのは、藤田さん。
二十歳の自閉症スペクトラム障害のお子さん(Fさん)のお母さんです。

幼いころから周囲とは異なる子育てに、ずっと一人悩み苦しんでいたという藤田さん。

普通級に在籍していた小学校一年の時、Fさんは自閉症スペクトラム障害と診断されました。

今までずっと、思うようにいかない子育てにプレッシャーを抱えていた藤田さん。

周りとは異なるFさんの行動一つ一つに、「どうしてできないの?」「なんでやらないの?」と、つらい思いをしてきました。

診断を聞いたときは、「私のせいじゃなかったんだ。」と安心して、たくさんの涙が出たそうです。
Fさんは、2年生からは支援級に通うことになりました。

そこで小学校の介助員をしていた現きなこ職員、Mさんとの出会いがありました。

「子ども達と一緒に楽しそうに支援してくれる人がいる！」

藤田さんは、子どもと共に考えることの大切さに気付き、自身の考えが変わったそうです。

『「どうして?」「なんで?」ではなく、その子にはその子の考え方・感じ方がある。それでできないし、いやなんだ。』と。
6年生からは、立ち上がったばかりのきなこに通いはじめたFさん。

大好きな絵を書き、相手に自分の思いを伝え、のびのびとすごしたそうです。

今回の会場にも、Fさんのたくさんの絵が貼られていました。

彩りあざやかに細部まで丁寧に書かれたそれらの絵は、自由で楽しいオリジナリティあふれる世界が広がっています。



藤田さんは、中学校の支援級の説明会の話もされました。

中学校の先生は、

「支援級の子は高校を卒業したら働く。どこで働きたいか考えた上で支援学校を選ぶこと。」

と言われたそうです。その言葉に、

「まだ5年生なのにそんなことを言われても…。」

と複雑な思いになってしまったそうです。

別の中学校に行くこともできず進学したその学校で、主任の先生に理不尽な言葉を言われ、親子でつらい思いをしたこと。

でもそのことを校長先生に伝え、きちんと対応してもらえたこと。

それから、支援学校高等部への進学。卒業後。と、その都度進路で悩んできたこと。

だけど、「親が先回りをするよりは、本人の意思を尊重することが大事。」と考え、進路を選択してきたことなどを話してくださいました。

Fさんは今、自立訓練校に通い、毎日とても楽しく過ごしているそうです。

このあとは、同じ事業所の就労移行支援に通う予定です。

藤田さんは最後に、「長い人生、就職するのは1か所とは限らないし、向き合いながら、本人が決めたことに協力できたらいいのかな。と思っています。」

と、おっしゃっていました。

シンポジウム当日、進行を担当していたきなこの職員のMさんは、

「今まで色々と葛藤があったと思います。だけど、お母さんが常にFさんの『何がしたいんだろうと？』という気持ちに寄り添って考えてきた結果、とても優しい良い子に育っているのだと思います。」

と話していました。

藤田さんの、あせらず、周りに流されることなく、何よりもFさんの笑顔を大切に育んで来た姿が、本当に素敵だなあ。と感じました。

(sakuko)



②「子どもに敬意を払い、子どもから学ぶ えがおのたね 10 周年、『理念』と『行動指針』に立ち返る」 ～代表理事 谷田悦男さんのお話～

「障害児通所支援事業所」

そう聞いて、皆さんはどういうイメージをお持ちになるでしょうか？

「何かができるようになる」場所。

世の中の「〇〇すべき」を教える場所。

そんなイメージを持たれる方が多いと思います。私もそうでした。

えがおのたね 10 周年のシンポジウム。

二番目に登壇されたのは、10月よりえがおのたねの代表理事になられた谷田悦男さんです。

谷田さんから、そんなイメージとは異なる事業所のお話を聞きました。

さらに、「遊びとは何か？」「生きるとは何か？」

そのような、人が生きる上で忘れてはならない。でも忘れてしまいかちな、根本的なところに立ち返る時間を頂けました。



最初に、谷田さんは、会場に貼られているFさんのたくさんの絵について説明されました。

長年特別支援教育に携わってきた谷田さんは、これらが、Fさんの「見て、聞いて、感じている世界」を反映していること。そして、彼だからこそ描ける世界であることを強調されました。

それから谷田さんは、今まで出会ってきたユニークな子どもたち。

その彼らを尊重する、周囲の大人たちの共通点を教えてくれました。

それは、子どもを「直す」対象とは考えていないこと。

さらに、自分とは異なる世界観を持つその子の感性を心から面白がり、そこから学び続けられる人。ということでした。

次に谷田さんは、そもそも「障害がある」とはどういうことなのかを説明されました。

「障害がある」ということは、心身の様子がオリジナル(少数派)で、多数派の人たちの作った世の中では、「困ってしまう」ことが多い状態であること。

そして、「障害のある人たちが変わるのでなく、この世の中が誰もが暮らしやすい社会に変わるべきだ。」という考え方である、「障害の社会モデル」について説明されました。

そのあとスライドには、「えがおのたね」の3つの理念が映し出されます。

□誰もが自分の幸せに向かって生きていけるように

□誰もが自分の思いを尊重されるように

□地域に根ざして存在価値があるように

谷田さんは、この理念を読み上げた後、

「えがおのたねは、『子どもをどう変えるか』ではなく、このような明日の社会へと変革していくことをめざす法人です。そこにこそこの法人の存在意義があると思う。」

と、力強く話されました。

えがおのたねの理念はそのまま、人間の多様性を包み込む「インクルーシブな社会」の実現をめざすことつながる。さらに、SDGs(国連サミットで採択された、持続可能でよりよい世界を目指す国際目標)の、「誰一人取り残さない」というスローガンにも通じる。と説明されました。

そして次に、それらを現実にするための「えがおのたね」の職員の行動指針が映し出されました。

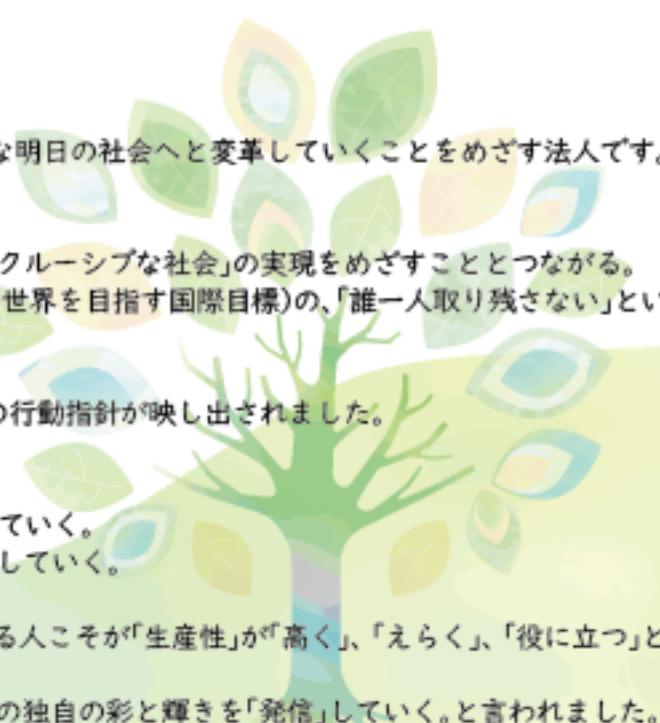
その中の一つに、以下の文章があります。

○個人や組織に生産性が求められる市場主義の価値観を転換していく。

～「あるがままに存在すること」が尊く価値があることを発信していく。

決められた事を決められた時間で、効率よくこなすことができる人こそが「生産性」が「高く」、「えらく」、「役に立つ」とする価値観。

谷田さんは、そのような価値観を転換し、「少数派」の子どもたちの独自の彩と輝きを「発信」していく。と言われました。



そして、NPO 法人「えがおのたね」が、「創立 10 周年」の今、「理念」と「行動指針」に立ち返り日々の実践の中で、大切にしていることを、以下のように説明されました。

子どもが「〇〇できるようになる」を考える前に。

まずは、あせらずに、

『その子どもならではの、常識にとらわれないユニークな部分』をみつけ、言葉にし、職員同士で活き活きと語り合うこと。

そして、

・「〇〇すべき」という常識は、個人や時代で異なる、「浮足立った」性格のものである。

・しっかりと「地に足をつけ」、その子ならではの「見て・聞いて・感じている世界」を出発点とすることが大切である。ということを繰り返し強調されました。

ここで谷田さんは、「きなこ 水遊び部」というタイトルのえがおのたねのコラムを紹介します。

<http://column.egaonotane.biz/?eid=68>

きなこの玄関で、水風船を叩き割って生き生きと遊ぶ「部長」。

その巧みな技にあこがれて、部長のバケツの運び方まで真似をする「部員」。

風船の種類を変えたり、割れやすいように裂け目をつけたり…。

試行錯誤しながら遊びを極めていきます。

そして、思う存分楽しんだ後は、自発的にデッキブラシを使ってお掃除をします。

大人の常識にとらわれず、生き生きと過ごす彼らの姿。

主体はあくまでも子どもであり、「その子ならではの世界観」からすべてが始まる、えがおのたねらしい光景がそこには広がっています。

谷田さんは、その様子を実際に楽しそうに説明されながら、「この子を見て、仕事も学問も全て『遊び』が人間活動の原点であることを感じた。」と話されました。

そしてスライドには、「えがおのたね」の理念の「地域に根ざして存在価値があるように」という言葉が映し出されます。

谷田さんはこの言葉を、えがおのたねを主語にして、

「インクルーシブな明日の社会を予感する光で、ます『きなこ』と『Lino』を満たし・・・」

「その光を地域に照らす、光源であり続けることに・・・」

えがおのたねは「地域に根差して存在価値がある」。

と語られました。

そして最後に、

「えがおのたねの存在価値が、ここにあることを再確認し、10 周年の節目とさせていただきます。」

と、お話を結ばれました。

谷田さんのお話から、

「変わらなくてはいけないのは誰なのか？何なのか？」

ということを改めて考えさせられました。

そして、変わるために、

「あせらずに、まず、子どもに敬意を払い、子どもから学ぶ」

そして、彼らが「あるがままに存在すること」が尊く価値があることを発信していく。

そのような活動を通じてこそ、インクルーシブな社会の実現や、「誰一人取り残さない」明日の社会を実現することができるのだと思いました。



10 周年の節目で、えがおのたねの「理念」と「行動指針」に立ち返る時間を持てたこと。

その時間は、さらなる 10 年に向けての礎となる、何より大切な時間であったように感じました。

(sakuko)

③ 「こどもも、大人も」～聖学院大学 大橋良枝先生のお話～

えがおのたね10周年のシンポジウム。

最後に登壇されたのは、聖学院大学の大橋良枝先生です。

大橋先生は12年前から、埼玉県内の特別支援学校などで子どもや先生方の心理的サポートをされています。

えがおのたねの支援のあり方に共感してくださり、これまでも講座の共催などを行ってきました。

最初に大橋先生は、

「こうした大事な節目の時に呼んで頂き、とても嬉しく思っています。

今日はこども自身ではなく、こどものまわりにいる大人として、皆さんがどんな気持ちで日々を送っているか。ということを想像しながらお話をさせて頂きます。

ひいては、『子どもの可能性を開く』というのがテーマですが、『大人の可能性も開けるといいな』という思いでお伝えさせていただきます。」

と言われました。



それから先生は、観察に行った支援学校でのエピソードを話されました。

そこでは、「その子自身の内側から、学びへの欲求や自立性が生まれてくる。」という、子どもの可能性を信じ、彼らの自由を守る指導を行っていました。

その中で、複雑な思いを抱える大人たちについて以下のように説明されました。

保護者や教師・福祉職員。そのような子どもを守り、あるいは育てる立場にある大人。

その人たちは、目の前の子どもの今。そして、将来の幸せを願います。子どものために良い大人でありたいと思います。

だけどわからなくなるのです。

これは子どものためなのか？

それとも自分が子どもをコントロールしたいだけなのか？

子どものことを思うがゆえに、悩み迷います。

そして不安になるのです。

この子は今の環境に適応できているのか？

この先の将来は大丈夫なのか？と。

さらに、個人の考え方の違い。これまでの教育の在り方。時代の変化。世間の価値観。

様々な事柄が、子どもと向き合う大人の前にたちはだかります。

レジメにはこう書いてありました。

『私たちはいつも悩みながら子どもの前に立っている』と。

先生はさらに説明されます。

迷い・悩み、不安になった大人は、時に子どもの能力を伸ばすことで安心しようとします。

「知能」や「技能」、「対人関係の力」。

そのような、目に見えてわかりやすい能力を伸ばすことで、自分の不安を解消しようとするのです。

その結果、「その子どもが、穏やかな気持ちで幸せに生きる。そのため自分は何ができるだろうか？」という一番大切なことを置き去りにして。

さらに、子どもと向き合う大人は、その子の言動の責任。また、その子とのかかわり方が、「人からどう思われるだろうか？」そんな不安を抱きます。

そしてその不安のせいで、相手をコントロールしてその自由を奪いたくなるのです。



考えてみれば、「良い大人でありたい」「子どものために」と思っていれば、必ず不安になります。

特に定型発達ではない子どもと向き合っている大人は、その個別性の大きさから、これから見通しがたちません。それゆえ、迷いや不安を抱くのが必然です。

そして、残念ながら今の社会は、障害のある人への理解がまだ足りず、彼らが暮らしていくには未成熟な状態です。

そのような状況の中で少数派の子を育てる。

あるいは、社会の価値観とは異なる、「こういった社会を作りたい。」という信念を持って子どもたちを支援していく。

それらは、非常に大変なことだと思います。

意志が大事だが、意志だけではできない。孤立してはできない。

さきほどお話をしているように、支援や子育ては迷い続けるプロセスです。

そんな時に、不安を抱えた自分が不完全だと思うと逆に自分の不安を口にだせなくなってしまう。

その結果孤独になってしまいうリスクが非常に高い。これが不安な人が孤独に陥る負のループです。

社会が成熟していない中で、こういったお子さんの一人一人の自由や幸せ。成長を願うためには、大人自身が不安を乗り越え、支え合ってともに仲間と協調していかなくてはいけない。

だから私が最後に強調したいのは、「支え合う力」です。

ただ、人を頼ることは少し勇気が必要です。

きっとえがおのたねさんは、保護者。内部の支援者同士・学校など、様々なところと支え合う力を發揮していらっしゃると思います。

えがおのたねの中で「人に支えられる」。あるいは「人の間で孤独ではない」。ということを感じ、体験して、それを外の社会にも広げていってほしい。さきほど谷田さんがおっしゃっていたように、光を発するえがおのたねであってほしい。

人は皆、不完全です。

そして不完全であることは欠点ではない。

不安な時に少し勇気をだして人に頼れたなら、その時には「人と支え合う」という何よりの喜びをえることができます。

それが、大人も子どもも成長しつづける。ということではないでしょうか？

と、言葉を結ばれました。

会場にいた保護者や支援者の方は、きっとそれぞれが幸せを願うお子さんことを思い浮かべながら、お話を聞いていましたと思います。

そして、子どもと向き合う自分自身に不安や迷いがあっていい。さらには、そこから少し勇気をだして、人を頼ってもいいんだ。そのように思えたのではないかでしょうか？

「支え合う力」によって、ともに不安を乗り越えて行く。

それこそが、不完全な大人も子どもも。さらには、より良い社会への可能性が開けるたった一つの方法なのではないか？と感じました。

(sakuko)



④ 会場からの質問とパネリストの方々のご回答

シンポジウムの第二部は、会場から質問を募りパネリストの皆さんにお答えいただきました。以下、質疑応答の内容です。

<一人目> 小学校低学年女子のお母さんからのご質問。

お母さん：普通級に在籍しているが不登校になり、診断を受けた結果、ASD グレーゾーンと言われた。先生からは「努力が足りないのでは？」と思われ不適切な指導があった。親も頑張らせてしまった結果、人間不信になり、人目を避けるようになってしまった。子どもが家から出ない。人がこわい。という状況で、どう支えればいいのか？支えてもらう経験を積ませてあげればいいのか？



藤田さん：たくさんの方に支援をいただいた方がいい。自分も色々なところに行って、そこで世間話のようにたくさんの人伝ええた。それが縁になって、色々な良い情報が入ってきたりすることもあるので。

谷田さん：2つのことをお伝えしたい。

一つ目は、他の人とどんなに違ってもいいからお子さんの好きなことはありますか？

お母さん：ぬいぐるみを使って会話をすることです。

谷田さん：他の子にはできない物語を作っている。その面白さをお子さんといっしょに楽しんでみましょう。これからつながる相談機関も、その面白さを共有してくれるところならば大丈夫。

二つ目です。今、小学校も特別ニーズのある子は、「担任だけでなく学校全体で支えましょう。」と文部科学省も盛んに言っている。その窓口になるのがコーディネーターの先生です。小学校に必ずいるので、教頭・校長を通じてでもいいから、少し話をしてみたほうがいい。その時に、「こういう面白いところがあります。」と伝えて、反応する人がいるかどうか？必ずいると思います。

大橋先生：ASD のグレーの女の子は少ないし、幼稚園・小学校の女の子の人間関係は大変ですよね。

彼女は、「何も悪いことしていないのに。」という思いで、とっても辛い目にあってているのだと思う。そんな中で、「行きたくない」と思うことはとても健康なこと。

その子どもの思いはわかりつつ、親は「これからどうなってしまうのだろう…。」という心配がある。お母さんと子どもで悩みが違う。それぞれが自分の時間を持つて支援機関につながる。あるいは、お子さんはプログラミングの塾でも放デイでも、学童でも。どこか居場所があるといいと思う。でも今はまだその段階じゃない。いったん家に閉じこもる。という選択は健康的。

<二人目> 特別支援学校の先生からのご質問。

先生：藤田さんがおっしゃっていた、「障害があったら高校を出てすぐ働くなくちゃいけないのか？」という思い、ずっと自分も持っていた。働くための学校なのか？職業教育をするための学校ではない。

障害のある方を絶対に社会で役に立たせるために学校へ行かなくてはいけないのか？

藤田さん：ありがとうございます。一個人の意見ですが、共感していただけて嬉しいです。

こないだ息子のクリニックの先生に障害年金の申請で 6 年ぶりに会いました。その時に、「6 年前と変わっていないね。お母さん頑張ったね。」と言ってくださいり、そこで涙が出た。不安でいっぱいだったが、そこで救われた。今、人生 100 年時代。息子は 20 代になったばかり。これからもゆっくり、長いスパンで見ていきたいと思っています。

谷田さん：一つの言葉が人によって捉え方が違う可能性がある。「働く」という言葉に関しても、

特別支援学校高等部の古い進路指導の先生の中には、就職希望の子に対して、

「世の中に出たら困るから。あれができるように。これができるように。」

と、あまりにも生徒の実態からかけ離れた指導をする先生もいた。その結果、生徒が不登校になってしまう。

一方で、30 年前の工業高校で、「授業を受けるより働きたい」という子もいっぱいいた。

何か「大人になりたい。」「自分なりに社会に参加したい。」という思いがあったのかもしれない。

一部の進路指導の先生が言っているような、

『人間が大きな組織のコマとして、決められた時間言われたことだけをやる。』

ということが果たして「働く」なのか？

それとも働くことそのものが、何かワクワクするような中身をもっている「働く」なのか？

『人間が大きな組織の部品のように働く』というのは、ここ 300 年間くらいのこと。

大昔の採集狩猟民は、「スリルを伴って獲物を追いかける」という、一日 3 時間くらいの労働だった。

私たちが見ている子どもたち・青年たちから逆に、「この子達が働く。」というのはどういうことなのか？」

「ただ単にコマになるのではなく、生きがいを持って働く。とはどういうことだろう？」

さらには、「人間は、何のために働くのか？何のために生きるのか？」というものすごく大事なことを教わる。

私たちが、コマにはならないであろう人から教わり、自分のこととして考えることが大事。

大橋先生：「障害があるからすぐ働く。」というのは、どうなのかな？と、自分も思っていた。

と同時に、働く大人は本人が非常につらい。

働くことは、遊びの延長であり、自分の喜びでもある。そして、働くことによって人との間に生きることができるようになる。ネットワークの中に身を置ける。今の日本では、働くないと社会にいられない。

谷田さんがおっしゃっていたように、レールに押しだされて乗るように働く。ということを、考えることなしに親や教師がやり始めてしまうことが問題なのだと思う。働くことを否定しているわけではない。

<3人目>放デイのきなこで働いている木村さんのご感想。

木村さん：遊ぶ。働く。人とのつながりの大切さがキーワードだと感じた。

人に強いられて、「働く」といってから働く」というその時点で、すでに何かを失っている気がする。今の社会がそうなっているところがあるように思う。

自由な教室の話があったが、自分たちは気づかぬうちに様々な価値観を身にまとっている。

自分が、日々子どもたちと接するなかで、ゆらぎがある。毎回問われている。

こういう機会に、働くとは。遊びとは何か。これら忘れがちになってしまふことを改めて考えられたら。と思った。

都さん（きなこの職員・進行係）：一緒に仕事をしている時に木村さんが、「『何もしなくてもいいけど、今日はここにちょっと行きたい気分だな。』そんな気分で行ける、なんでもない場所がほしいね。」と言っていて。「あ、そうだな。」と思った。「働く」でもなく「遊ぶ」でもなく、何をするでもなく。

答えは「1つでも2つでもなく、無限にある。そんな中で、子どもたちに「これやって」と言ったときの反応とかで、「はっ。」とさせられるときがある。

大橋先生：さきほど思ったのですが。答えが「1つになったら それは嘘だし。

不安や迷いがなくなってしまふ。ただ、みんな不安と迷いは不愉快で嫌。

今、「不安や迷いがある」「答えは1つじゃない」という話をおっしゃっている時点で、良い支援だと感じる。

聞いていて、ご縁を持たせて頂いて幸せだな。と思っています。ありがとうございます。



<四人目>きなこに娘さんが通われているお母さんからのご感想。

お母さん：今、ChatGPT や AI とかがあり、仕事もこれからすごく変わっていくと思う。障害を持っている子ども達も、長所をさらにのばしていけば AI にもできないようなこともできるのではないか？と思っていて。これから色々なものが世の中につれてきたとき、子ども達が自分の可能性をもっと伸ばせるような社会になっていくのではないか？という希望を持っています。

谷田さん：すごく積極的に将来のことを考えていて嬉しい。1週間前、えがおのたねの理事の野末さん（研修講師・就労支援業）の10周年の集まりに行きました。働いている方も、個性的な人が多かった。自分が「障害者支援をやっている。」と自己紹介したら、「あの人たちの方が、凡人にはない色々な面白い発想を持っていると思う。」と言っていた。

IT が典型的だけど、近代は終わっていると思う。我々が今後の働き方を主体的に作っていかないといけない。色々な働き方がある。福祉の枠をこえて、もっと色んなネットワークとつながって考えていく。マッチングが大切。学校に行くことや、コマのように働くことが人生の目的ではない。「なんか今日やったぜ。」と思いながら働く。それが「働く」ということなのかな。なんとかなる（という世界を）次の10周年に向けて作っていきたい。混沌としていく中で、一人一人彩り豊かな世界を作っていく。それが今の大人の責任。「人間はコマじゃない。」ということを日々子ども達から教えてもらっている。

大橋先生：所属している大学で、発達障害の当事者の講演会があった。いずれも社会で活躍している人たちで、発達バーのイケメン。エッセイスト。ADHD の放デイの経営者の三人が話をした。放デイの経営者はアイデアマンで、不登校の子のための訪問看護を立ち上げた。自分じゃないと見えない社会の課題やニーズを拾い上げて仕事をしていた。「社会の問題をかえていくためにどうすればいいかな？」と考えて行動していくことは、とても意義のある仕事だと思う。頑張ってほしい。

<五人目>お子さんに知的障害があるお母さんからのご質問。

谷田さんの、「コマにならない人から学ぶ。」というお話に関してなのですが。

息子はいつも、今を。自分の思いを大切に生きています。一方自分は、「人からこう見られたい。」という思いが根深くあります。自分を生きる息子の姿から、日々多くのことを学んでいます。

でも一步外に出ると、息子のちぐはぐな言動などを恥ずかしく感じてしまいます。

そこに抗うためには、仲間と結ぶことが大切。と思いつつ、その中でも比べてつらくなってしまうのですが…。

藤田さん：ものすごく共感します。うちの息子は、人前で興奮するとジャンプして外に行ってしまいます。

世間的にどうなのかと思い、最初のころは「やめましょう」と言っていたが、やめられるわけではない。それによって本人が落ち着いたりしていた。

同じ支援級で、あるていど会話ができる子と比べてマイナス感情になることもあった。

でも息子を見ていると、息子は全然恥ずかしいと思っていない。堂々としている。

私も堂々としていいんだ。これが本当の姿であって、隠す必要はないし、周りがどう思っても「これがうちの子です。」みたいな感じです。すごく気持ちはわかるので。いっしょに頑張っていきましょう。

谷田さん：人間は、その社会構造を取り込まないと社会化はされない。保護者や先生、本人でも、知的障害の人など自分と違う状態の人を見て、「できない」とマイナスの意味付けをしてしまうのは自然な話。そうでありながら新しい方を目指せる。その時に学びがいる。

「そう思う自分がいるな」と思えるかどうか。否定せず気楽にうけながす。と同時に、「こういう社会にならないとつまらないな」と、考えていく。

人間はそれだけ矛盾しているのだと思う。だいたい、生きていることそのものが矛盾している。死ぬのが分かっていて頑張るのだから。泥の中から蓮の花が咲けるように。否定はせずに、学びと意志の力で。それは独りではできない。そのためにはおのたねがある。そこでつながりながら。「そう思ってしまう自分はいるな。」と、気楽に受け流しながら。でも10年後に自分はどうなるか。そこに向かっていく自分は楽しいな。と感じられるといいと思います。

大橋先生：直接の答えではないけど2つのことを思って。

一つはきっと、こうやって私たちのように障害のあるお子さんと親しく付き合った人たちと付き合ったことがない人たちがいて。付き合ったことがない人たちには、わからないから怖い。

私自身も12年前、たまたま所沢支援学校へ来て、一人一人心が違うということを知った。知るまでは怖かった。知らせていくことも大事。

二つ目は、ティーチを日本に取り入れた佐々木正美先生の話です。以前、先生の晩年のビデオを拝見した。

その中で印象深かったのが、息子さんがAS(自閉症スペクトラム)で、亀が好きで。年頃の息子さんは、カメの世話をするが、人とつきあおうとしない。その様子を見て母親は、「あなたは結婚しないの?」と聞く。それを佐々木先生は、「母親ですね。」という。母親は心配する。それは母親の個性。息子は、「やっぱりカメの方が好き。」と言う。母親と息子で3日に一度とか、いつまでもそのやりとりをする。それを見て佐々木先生は、「この子はうそをつかないからこの子の立場でいよう」と考えたそうです。

一人の子どもに対してそのようにいろんな視点で見守る人がいる。だから、心配する母親がいていいのではないか。そのことを思い出しながら、伝えたくなりました。

二部では感想や質問などをもとに、さらに議論を深めることができました。

保護者や支援者の質問や感想に、自分の思いを重ねられた方も多いかったのではないかと思います。



⑤ パネリストの皆さんとのまとめの言葉、アンケートの回答など

シンポジウムは質疑応答を終え、最後にパネリストの方お一人ずつからまとめの言葉を頂きました。

藤田さん：本日はえがおのたね 10 周年おめでとうございます。

えがおのたねのスタッフは、みなさんお母さんを褒めることが上手な方ばかりでした。

これからも、お母さんが褒めてもらってリラックスして、「これでいいんだ。」と安心できるような環境を引き続き作っていただけて、それが子ども達にもいい影響を与えるのだと思います。

谷田さん：今日は藤田さん、大橋先生、お忙しい中ありがとうございます。それから会場の皆さんおいで頂きありがとうございます。私からは 2 つ伝えたいことがあります。

1 つは、さっき自分の話で言おうとしたことです。放ディのスタッフ、学校の先生。あと保護者の方々も。

何をやっているのだからわからないけれど子どもと 2 人でいる時間。放ディや学校だと周りから「仕事しているのかな?」と思われるような。あるいは自分でもそう思ったりするような時間。

私のテーマに「あせるな」と書いてあったでしょ。そこは大切にしてください。そこであせって仕事をしていないようには、さっき言ったように仕事の内容を取り違えている。何か、人格をなくしてコマのように働くことが労働だと思い込んでいる。市場主義の価値観に毒されていると思ったほうがいい。本当にそういうところはあせらずに余裕をもって。子どもと何をするでもなくいる時間は大事だと私は思います。

2 つ目は、エピソードの紹介です。

10 年ぐらい前、県立学校の先生方の集まりで、入間若草特別高等支援学校の普通科の先生が報告していました。現場実習(企業や作業所に働く練習をしに行く)あけの話です。

普通科だけ一般就労できそうな生徒で、気のいい社長のいる小さな企業で実習していました。

最後の日に保護者や担任の先生も一緒に、まとめのあいさつに行きました。

その時に社長が、「〇〇君どうだった?」と感想を聞くと、「毎日帰る時の夕やけが綺麗だった。」と彼が言いました。そうしたら社長は涙ぐんで、「君みたいに言える人がわが社にほしい。その発言をベースにして、あなたを採用する方向で検討する。」と言って、それで採用されたそうです。

社長は、コマの人間は知らない。彼のような人がいる方が生産性は上がると思った。本当にマッチング。必ずその人が生きる道ってどこかにある。そこに出会っていただくのは我々の責任だし、それは誰か一人がやるのではなくて、知っている人を少しずつふやしながら、それこそみんなで連携してやらないといけない。

大橋先生：色々話してしまったので、何かエピソードを置いていきますね。

実は私は、中度の知的障害のある女の子のカウンセリングを 2 年ぐらいしています。

私はその子と話していく、いかに「言葉はあっても人に理解してもらえないこと」が苦しいのかをたくさん学びました。それが一つ、中度から軽度のお子さんたちが本当に苦しんでいることなのだろうと思います。だから、そういう子たちの言葉に耳を傾けることは、とても注意深くやらなくてはいけない。ということを教えてもらいました。でもそうやって必死で話を聞いていたら、すごく変わりました。何が変わったかというと、自分が好きになった。言いたいことが言えるようになった。自信がなくて友達を作りたいけれど、友達に話しかけることができない子だったが、友達ができてディズニーランドに一緒に行った。と教えてくれるようになりました。

私は先ほど、「対人関係・知能・技術を伸ばそうとしたくなる。」というお話をしました。けれどそれは、

心が柔らかくなったら自然とそういう力が出てくるかもしれない。とも思っています。

そういう場所を提供しよう。自由な空間を作ろうとしているのがこちらの放ディさんかな。と思っていて、今日は聞いていて胸が熱くなることが多かったです。本当に素晴らしい時間に招待していただけてありがとうございました。

そして最後に司会の、

「大橋先生、谷田さん、藤田さん。今日は貴重なお話を本当にありがとうございました。えがおのたねが 10 周年を迎えたのは、皆様のお力添えとご支援のおかげです。これからも引き続き頑張っていきますので、かわらず応援していただけると幸いです。よろしくお願ひいたします。」という言葉で、シンポジウムは終了しました。

終了後のアンケートには、こんな感想が書かれていました。

<一般の参加者の方>

- ・常識、世間体、そんなことに苦しめられていた自分に気付きました。(略)子どもの視点に立って世界を見てみよう、敬意をもって信じてみよう。そんな気持ちです。
- ・少数派の子ども達をかえるのではなく、変わるべきは自分達なのだということ。それこそが世の中を正しく導いていく力なのだとあらためて感じました。
- ・終始、愛と子どもたちへの敬意を感じる会で胸がいっぱいでした。

- ・勇気を出して発言して下さったお母様が、笑顔で子育てを楽しめる、おもしろがれる世の中を少しずつでも作っていけたらいいなあと思いました。
- ・看護学生という立場で、来年から所沢地区の看護師になるにあたり、皆さんの活動や心意気、葛藤を実際に聞くことができ、とても考えさせられるものがありました。(略)今回のようないいなあと思いつくことは、とても考える深まるものだと思ったとともに、話し合う会を医療者にも声をかけてくださると、より社会変革につながるのではないかと学生ながらに思いました。

くえがおのたねの職員の方>

- ・自分はいちスタッフとして、『障害とはなんなのか』『どんな世界にならいいのか』『支援者として何をしたらいいのか』ということが明確になりました。
- ・「優秀であってほしい」「でもせめて、普通であってほしい」と、ご自分の育ちから得た価値観に対して真面目に頑張ることを続けていらっしゃる、保護者の方々皆さんに参加して欲しいと感じました。
- ・それぞれのパネラーさんが、個性と知識とを發揮しつつ、根っこには「その子の独特な世界を楽しもう」としていることが伝わってきて、どんな話にも共感ができました。

今回のシンポジウムに参加して、私は「この子らを世の光に」という言葉を思い出しました。

これは、「障害福祉の父」と呼ばれている糸賀一雄先生の言葉です。

『恵まれないかわいそうな「この子らに世の光を」当てる』のではなく、

『障害のある「この子らの存在そのものが世を明るくする光である』ということ。そして、その光に気づく人々を増やすのが自分たちの仕事である』と、繰り返し訴え続けた言葉だそうです。

「お子さんやご家族が、心から笑顔あふれる毎日を送って欲しい。」

そんな思いでスタッフは、10年間たくさんの「えがおのたね」を育んできました。

それは同時に、子どもに敬意を払い、子どもから学び続けた10年でもあります。

そこには、大人の常識にとらわれず生き生きと過ごす子どもたちの姿がありました。

そして今、閉塞感漂うこの社会で、「その姿こそが希望の光である」という信念のもと、えがおのたねは、これからもその輝きを発信していくことをしています。

大人自身が不安を乗り越えて支え合っていく。

そして、子どもたち一人一人の幸せとともに新しい彩りある社会を築いていく。

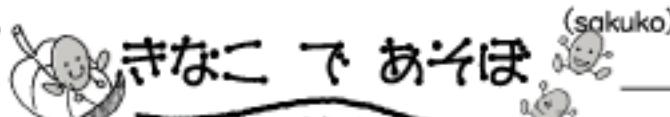
そんな力強い決意を感じた10周年のシンポジウムでした。

sakukoのコラム

児童発達支援/放課後等デイサービス
きなこ・Linoの様子をお知らせします！



sakukoのコラム
☆スマートでご覧いただけます☆



④きなこ

みんなで遊んで手作りおやつとお茶でほっと一息
楽しいおしゃべり悩みも気軽に相談
(個別相談も受け付けます)

対象: 未就学のお子さんとその保護者

参加費: おやつ代100円 場所: きなこ

1月23日(火)・2月13日(火)・3月12日(火)

9:30~11:00

※駐車場は狭いので、お申し込み時にご確認下さい。

私たちえがおのたねは、現在、正会員21名、賛助会員65名です。
充実した施設運営のため、新規の正会員・賛助会員を募集しています。ぜひ皆様のお力添えをお願いします。

H P・メール・お電話にてお知らせください。

会員、賛助会員の方には、季節ごとのたねまき通信や子育て情報をお届けします。既に会員の方には継続をよろしくお願いいたします。

《賛助会費》 一口 (年会費) 千円

《正会員費》 (入会金) 1万円 (年会費) 五千円

【振込み先】 ゆうちょ銀行 記号10360 番号21600941

えがおのたね時き通信
第37号 2024年1月発行

【発行】特定非営利活動法人えがおのたね

〒359-0021 所沢市東所沢 3-6-17

TEL/FAX 04-2008-2437(きなこ)

Email(メールアドレス)
info@egaonotane.biz



URL(ホームページ)
<https://egaonotane.biz/>

Email
info@egaonotane.biz

URL
<https://egaonotane.biz/>

えがおのたね会員の皆様へ

2024年1月

特定非営利活動法人えがおのたね
代表理事 谷田 悅男

お詫びとお願い

日頃より、当法人事業への御理解と御協力を賜り、感謝申し上げます。

昨年、当法人所管の放課後等デイサービス Lino を利用する児童本人、並びに保護者より「クリスタルボウル」や「ヒーリング」による施術やこれらに関する「外部セミナー」への勧誘があるとの報告や相談が複数件あり、調査を行いました。

結果、これらは当法人の前代表理事が特定の教義に基づき、個人の活動として行っていたものだと判明いたしました。

前代表理事の行為により、「クリスタルボウル」や「ヒーリング」の施術等が当法人の取り組みであるかのような誤解を一部関係者の方々に与えてしましましたが、本件は個人の意図によるもので、当法人が認めたものではありません。

このような事態は、当法人のコンプライアンスの不備から生じたものであり、この点について、皆様に深くお詫び申し上げます。

また、当法人として今後、コンプライアンスの徹底を図り、同じことの起きぬよう、再発防止に努めて参る所存です。

本件を受け、前代表理事は昨年 10 月 27 日付で代表理事を辞任し、11 月末をもって当法人を退職しました。

なお、児童あるいは保護者本人からの希望等により、現在も「クリスタルボウル」や「ヒーリング」による施術等を前代表理事より受けている事例もあると思われます。この場合において、皆様の支援業務上、「クリスタルボウル」や「ヒーリング」等の内容を確認する必要がある際には、お手数ですが、前代表理事に直接、お問い合わせください。

新たな「発見」の年に

あけましておめでとうございます。
今年を、新たな「発見」の年にしましょう。

子どもたちの「できる」を「発見」しましょう。
「この子は、あれもできない、これもできない」のでしょうか？
「笑うこと」「泣くこと」「怒ること」が「できる」のではないですか？
好きなものを食べることが「できる」、「牛乳は、飲みたくない」と言うことが「できる」、「ゲームをする」ことが「できる」ではないですか？
「学校に行きたくない」と自分の気持ちを表現し、主張することが「できる」ではないですか？
何よりも、「生きる」ことが「できる」のです。
おそらく「あこがれ」を、言葉にはならないかもしれないけど、秘かに抱くことが「できる」のです。明日、子どもが「できる」ようになることは、大人の「できてほしい」ことではなく、子どもの「あこがれ」からの「『できる』ようになりたいこと」でしょう。

子どもたちの「わかる」を、「発見」しましょう。
「この子は、あれもわからない、これもわからない」のでしょうか？
人は、生きている以上、その人なりに世界を「わかる」のです。
生まれ育った環境が異なれば、そこに生活する人たちが、世界をどのように「わかる」かも異なります。
同じように、心身の状態が独特な人たちには、その人なりの世界を「わかる」やりかたがあります。言葉の発達がゆっくりだからこそ、表面的な言葉にごまかされずに、矢のように鋭く人の本性を見抜き、「わかる」子どもたちがたくさんいます。

心身の状態が独特な人たちとその家族への、「世間」の「意味付け」は、「悲劇だ」、「かわいそう」といった失礼なものが、残念ながら、まだ主流のようです。
この「世間」の「意味づけ」とは異なる「意味づけ」を、「発見」しましょう。
同年齢の他の人たちと「同じ」ように、「同じ」ことを「同じ」速さで処理し、「同じ」結果を出せないのは、「価値が低い」、「劣る」ことなのでしょうか？
人類の長い歴史の中でみれば、「みんなと同じように、同じことができる」ことに価値が置かれ、特定のモノサシで人間が人間を踏み出す社会は、とても特殊でむしろ異常です。
「できない」、「わからない」というマイナスの「意味づけ」を脇において、この子は「ちがう」と「意味づけ」し直すことから、新たな「意味づけ」の発見が始まります。

超オリジナルな子どもたちの「できる」、「わかる」そして、子どもたちへの新たな「意味づけ」の「発見」で、えがおのたねを満たす年にしていきましょう。
それらの「発見」は、えがおのたねを超えて、やがて「世間」へと滲み出でていきます。
滲み出た「発見」は、柔らかで彩りある光を放ちながら、狭くて硬い「世間」を真に「持続可能な社会」へと変えていく、ささやかな、しかし、確かな力となるでしょう。

(谷田悦男)

最近のLino

あちこちでこどもたちの交流がみられます。
スタッフを介さず、こどもたちだけで場が
成立することも多くあるのですよ。



何気ない日々のなかから

何気なく生まれる…



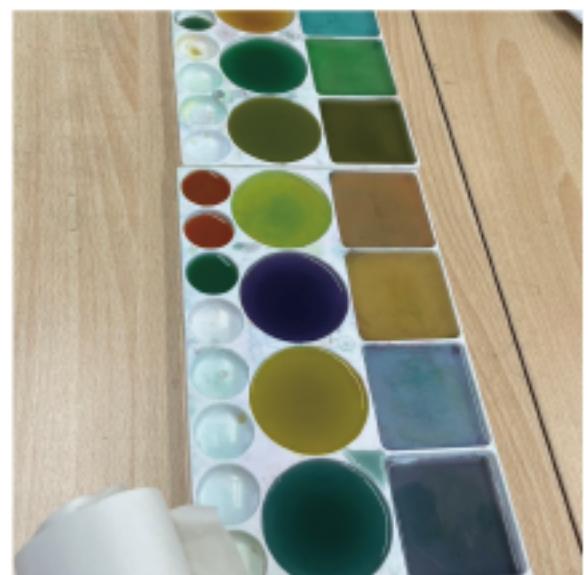
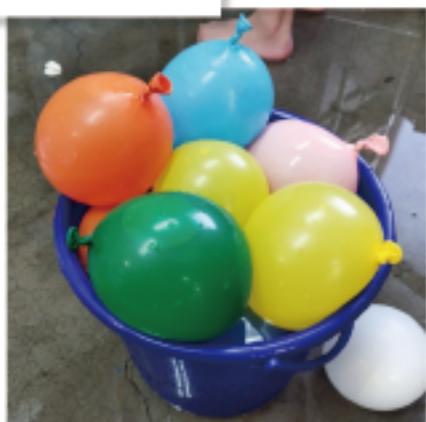
一つ一つが
愛おしい



きなこ
ギャラリー



「作品」を作ったなんて思っていないけど



「作品」になっちゃうんだよ



児童発達支援

放課後等デイサービス



放課後等デイサービス
Lino(リノ)

